

現代美術展

小田原ビエンナーレ2017

「感性の磁場Ⅱ」

青木允 飯室哲也 糸数都 鵜澤明民

栗原昇 駒林修 駒林文代 佐藤浩司郎

力五山 《加藤力 渡辺五大 山崎真一》

杉木奈美 堂免和実 中島けいきょう

關口佳明 前田精史 山下博己 米満泰彦

《実験映画……太田曜 渡辺哲也》

《写真展…「日常のモザイク」ドキュメンタリー2016~2017》

感性の磁場Ⅱ

現代に対面すると
私たちの身体の内では
刺激を受けた感性が
交錯を繰り返して動き回る

感性の磁場は
新たな姿の縁を作り
世界の構築を始める

青木允 AOKI Makoto

小さな畠にするために地面を掘っていくと石がゴロゴロ出てくる。少し掘ると粘土層になる。土と石を振り分けながら掘っていくと大きな石が顔を出す。この時大きさや形状など思い巡らし周りの土を取り除ける。

大きな石が掘られた跡には、なめらかな空洞が表れる。それをしばし眺めて、触ってみる。

近年絵画について思い付くこと

属性 重層 身体性 行為(削る、掘る、消す)

時間(変化)



2015年作 「背後 F-15」

89×86cm



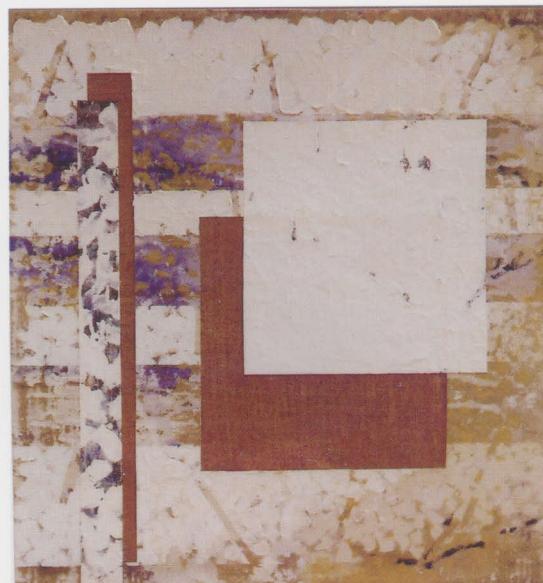
2016年作 「背後 G-16」

92×88cm



2017年作 「背後 K-17」

97×92cm



2016年作 「背後 J-16」

92×87cm

使用材料：ローキャンバス、麻布、アクリル絵の具、オイルスティック

飯室哲也 IIMURO Tetsuya

青年時に出会った作家の一人にシュビッターズがいた。
ジャンク(廃品)によるコラージュの世界が広がった。
MERZ(メルツ)が繰り返し制作された。
メルツハウも構築された。
第二次世界大戦では収容所に収容された。
収容所の中では、ウルルソナタが響いた。



2016年作 「過現未の循環—コラージュ」



紙類、石、草、アクリルペンキ フリーサイズ



2017年作 「過現未の循環—紙立体」 菓子箱等の紙類、細木、アクリルペンキ フリーサイズ

糸数都 ITOKAZU Miyako

ここ数年、油彩を休みあえて鉛筆画を続けた。油彩をこのまま続けていくと知っている手順に陥ってしまう。ならば禁欲的な手段ではあるが“色彩の響き合う空間、空気はどんなものであろう”じっと待ち気持ちを高めた。

色が空間が“ほどける”その時生じる一瞬を描いてみたいと思っている。



2017年作 「ほどける」

白亜地に油彩 103×73cm



2017年作「ほどける」白亜地に油彩 95×95cm



2017年作「ほどける」白亜地に油彩 95×95cm

何かを描くかではなく、何が絵画を絵画たらしめているかを探求する事。

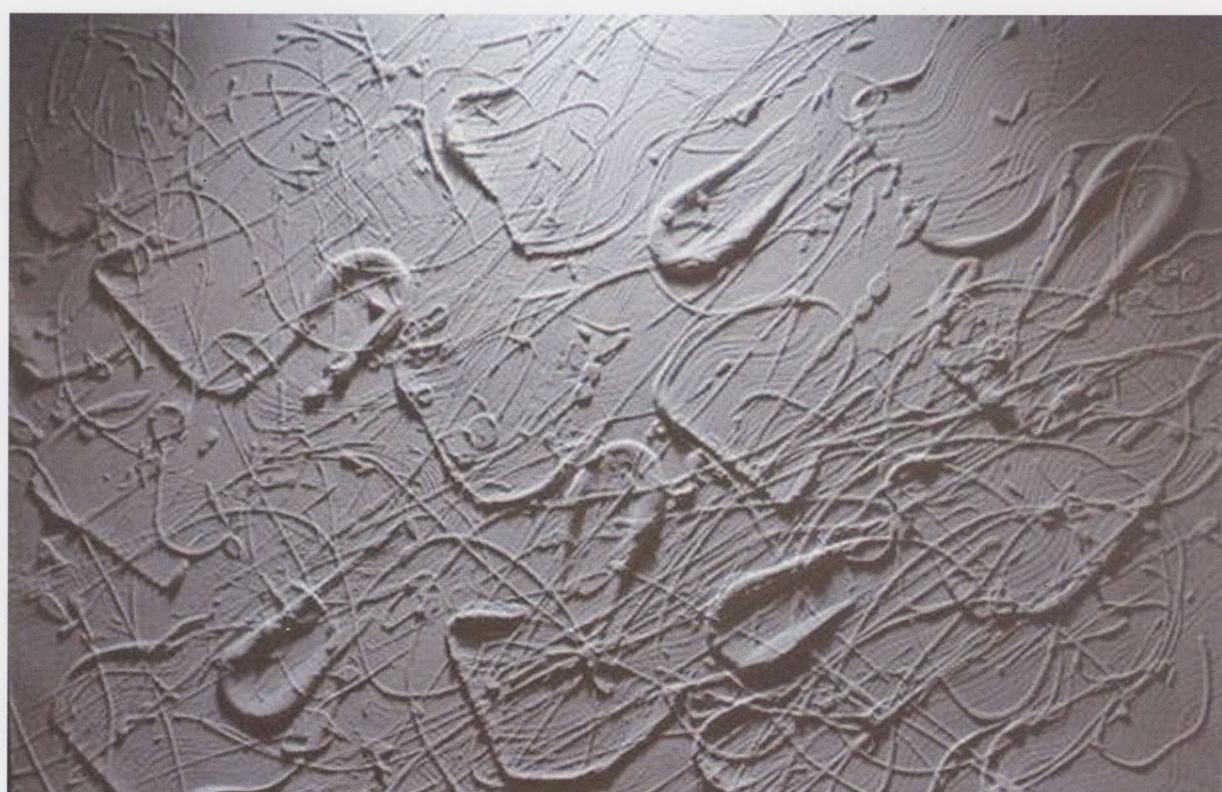
そこでは、目に見える「平面性・線・色彩」はもちろんの事「イメージ・イリュージョン・感情」と言った目に見えないそれを含めて、新たな問題として立ち現われる。

それは、絵画が生成する原点へといつも連れ戻すのだ。

そして、新しい無限の冒険が始まる。



2012年作 「ホワイト・ペインティングによる生成」
キャンバス、アクリル絵の具 116×91cm



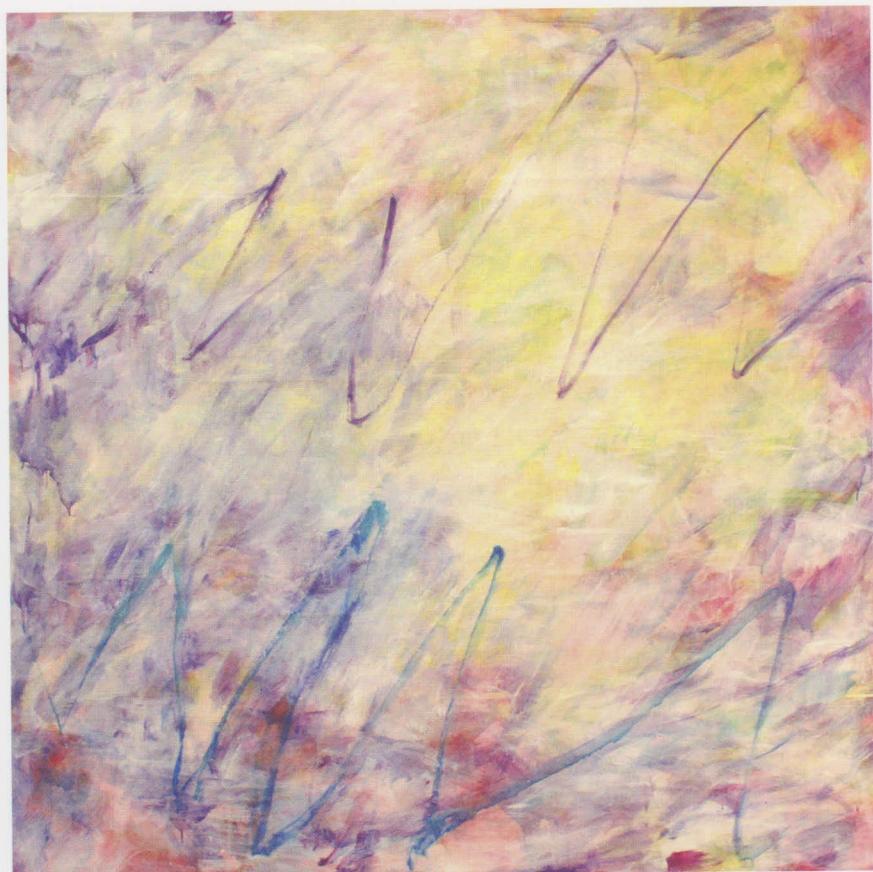
2012年作 「ホワイト・ペインティングによる生成」

ボード、アクリル絵の具 65×45cm

駒林修 KOMABAYASHI Osamu

「あさいおくゆきのあるひろがり」をテーマに制作を続けてきました。現実の「奥行き」や「広がり」ではない画面上の行為や時間のことなのですが、3・11の震災、原発事故の影響が波動のように現れてきて、画面は案外、現実にも開かれているのだなと感じています。だとすると、またひとつ、かかえていく問題が増えたわけで「おもいおくゆきのある広がり」にならないといいな。

キラキラ光る水面と、そこから数センチの奥行にある砂粒の底。その間を川の水はゆるやかに流れ幼かった私はそこに釣り糸を垂らしていた。たまたま釣り上げた小魚の手に伝わる動きと光の粒々の至福。後年、その川には汚染物質が流されていたと報告された。阿賀野川。水面から砂底までの奥行にあったのは水と光と小魚だけではなく、目に見えないさまざまな物質。また、同時に幸福のかけらもあったのだ。



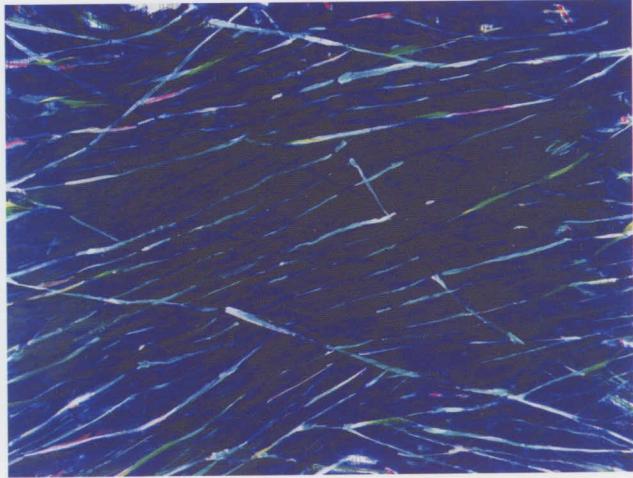
2015年作 キャンバス、油彩 162×162cm



2014年作 「PARALLEL IV」 会場風景



2006年作 「フェンネル」 キャンバス、油彩 259×194cm



2005年作 「ザルツ」 キャンバス、油彩 259×194cm

駒林文代 KOMABAYASHI Fumiyo



2012年作 「PARALLEL II」 会場風景

光があたるから色が見える。世界中の色彩は太陽の光の恩恵。残念ながら都会育ちの私は月明りだけの世界は知らない。(月明りも結局は太陽光のおかげな訳で) 太陽の光をあびて輝く色彩。動植物以外の無生物であっても、その美しさに感嘆する。なぜ美しく感じるのか、色彩の美しさは?と考えつづけているので「色」が制作テーマです。

風景や草花の色を再現したい訳ではありません。色彩にもっと近づき、もっと仲良くなりたくて、絵の具とおしゃべりしたり、時には紙と戯れたりしながら制作しています。



2013年作 「PARALLEL III」
キャンバス、油彩 50×30cm



2014年作 キャンバス、油彩
33×33cm



2016年作 キャンバス、油彩
41×41cm

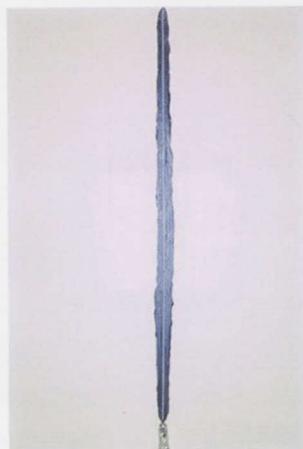


2013年作 「PARALLEL III」
キャンバス、油彩 50×30cm

栗原昇 KURIHARA Noboru

今、何を描くか？この歳になってもわからない。

唯、街を散策しているとなんとなくテーマが向こうからやってくることがある。そうすると何を描くというより、どう表現するかに興味がうつっていく。美術、絵画、彫刻、造形、その他すべての言葉が通りぬけそうな作品を創りたい。しかしそんな思いも後から付けたもの？普段の制作でおよそ考えたこともない。こういったパンフに書こうとするとどうも嘘っぽくなってしまう。作りたいように、描きたいようにやっているだけなのに。



1973年作 「変容現象」 145.5×97cm
キャンバスにアクリル絵の具他



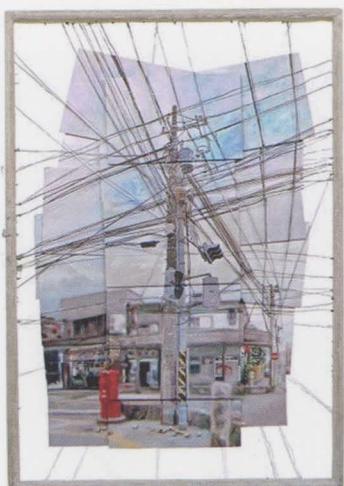
1995年作 「水たまり・コンテナ」 70×70cm
キャンバスにアクリル絵の具、ハンダ



1999年作 「建設現場2」 65×88cm
廃材にアクリル絵の具他



2012年作 「うどん工場と樹木」 79×80cm
合板にアクリル絵の具、コンクリート、有刺鉄線、錆



2015年作 「ポストと電柱のある風景」 153×102×5.5cm
板にアクリル絵の具、コンクリート、針金他 26.6kg



2015年作 「美術館正面入り口」 74×138cm 13.6kg
シナベニヤ・コンクリートパネルにアクリル絵の具、鉄筋

佐藤浩司郎 SATOH Kohjiroh

絵が生まれる瞬間
それを見たく
感じたく
行為している。



2016年 「YPS」 Yシャツにアクリルペイント



2016年 「CP」
ミニカーにアクリルペイント
7×3×2cm



2015年作 「P」 馬のフィギュアにアクリルペイント 7×7×3cm

杉木奈美 SUGIKI Nami

早く描かなければならない
頭や手や心や全てを使って
描き続けていないと
分らない

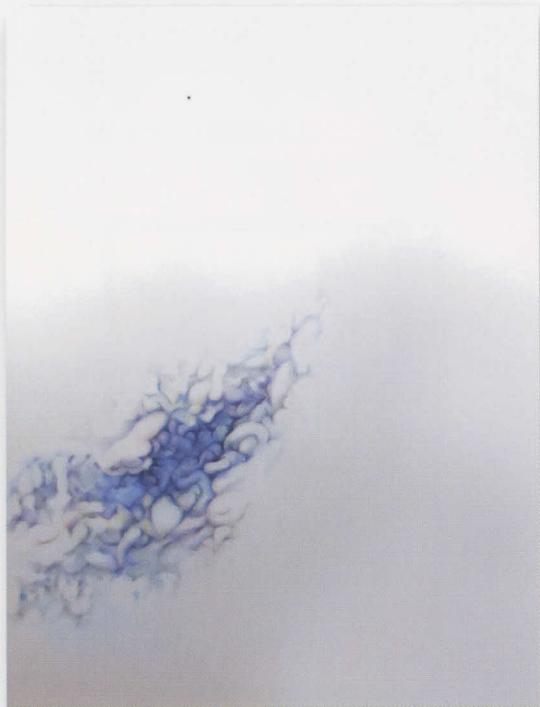
200年も300年も昔
この 小さな国のどこかで
一人の絵描きが
感じ 考えたはずのことがある

表層のことではなく
絵具や 表現方法や 表現形態や
描く対象の問題ではなく

描き続けていなければ
気づかないことがある



2016年作 和紙にアクリル絵の具、胡粉、墨、色鉛筆
24.6×40.1cm



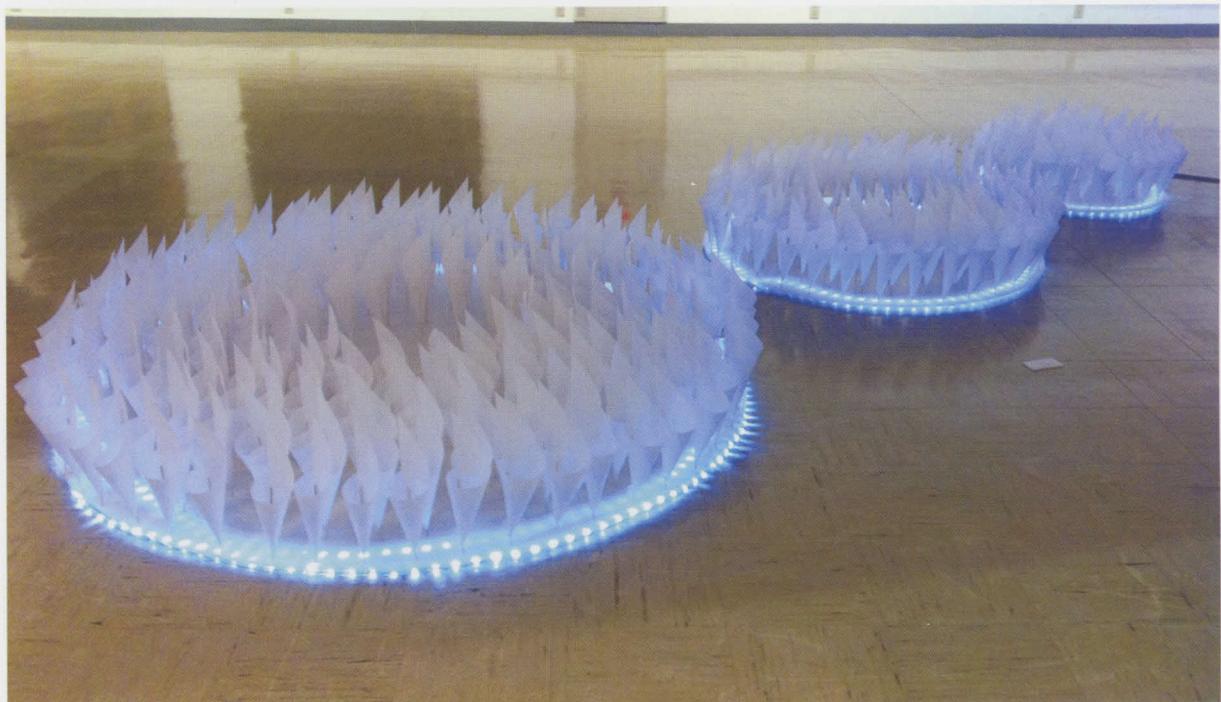
2017年作 和紙にアクリル絵の具、胡粉、墨、色鉛筆
31.0×40.0cm



2017年作 和紙にアクリル絵の具、胡粉、
墨、色鉛筆 14.4×30.3cm

堂免和実 DOMEN Kazumi

魚類や動物、地平線まで広がる植物の群生など圧倒的な生命が漲っている様子に魅了され制作している。それは、生まれる前の記憶に遡っていく気がする。



2013年作 「Untitled」

トレーシングペーパー、竹、プラダン

182×650cm



2015年作 「Nostalgia」

トレーシングペーパー、竹、プラダン

182×230cm

關口佳明 SEKIGUCHI Yoshiaki

『Water work』

水が対象に衝突するとき、それは様々な残像や痕跡を残す。その一瞬あるいは一定時間の残像や痕跡を絵画的に定着し作品化する。

2012年より始めた表現行為。前年に起きた自然の脅威が創作の契機。水によるマイナスの相乗作用の積み重ねが制作の基本。やがて玩具の水鉄砲との出会いが作品制作に劇的な変化、自由度をもたらす。見えてくるものと見えないもの。

さらなる発展が独自の制作装置の開発。簡易に水の変化を捉え定着し作品化する装置。と同時に制作行為そのものを可視化し、かつ複合的なオブジェ作品としても提示する。

並行してワークショップも行う。一般的な方法と異なる逆説的な制作と遊び感覚を交えた“意図された偶然”が参加者の興奮を呼ぶ。



2016年作 「Water work」

水、アクリル絵具、綿布等



2016年作 「Water work」

水、アクリル絵具、制作装置 他

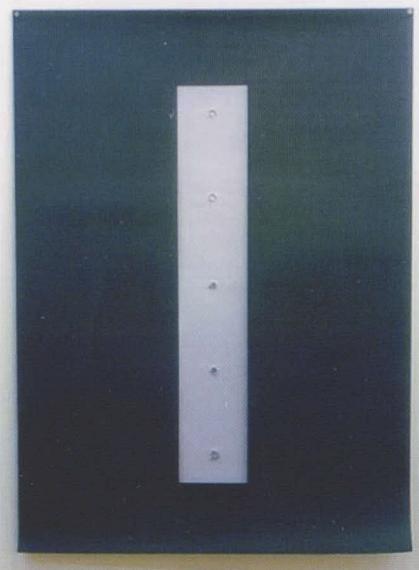


2015年作 “制作装置”

中島けいきょう NAKAJIMA Keikyou

こここのところ機会があつて、現代美術（特に20世紀）の語法についての考察を試みている。

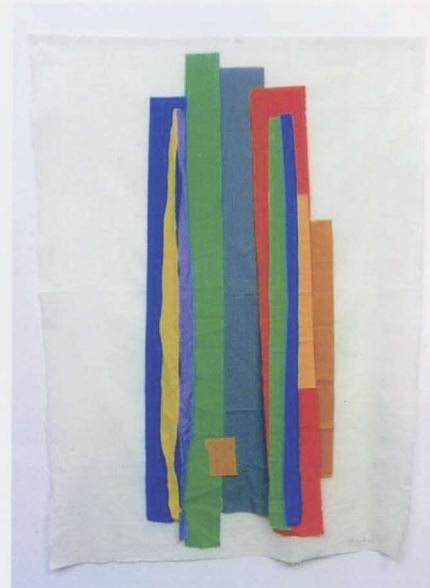
いわく「空間概念考」では、ルチオ・フォンタナのキャンバスにナイフを入れることで絵画を平面から3次元に解放したことを。また「四角四面頌」では、ジョセフ・アルバースの色彩学とそれと拮抗する図形の構成によるその僥倖感を。ほかでは、ポップ・アートの騎手のひとりロイ・リキテンスタインのピカソとモンドリアンのコピーのコピーを試みて、そこにAINシュタインのベロを出した写真を配して笑ってみせる「AINシュタインの舌」などと、またダダを模して色布の切れ端を垂らした「素材のダダ的活用」などと、これからも模索を続けるであろう。



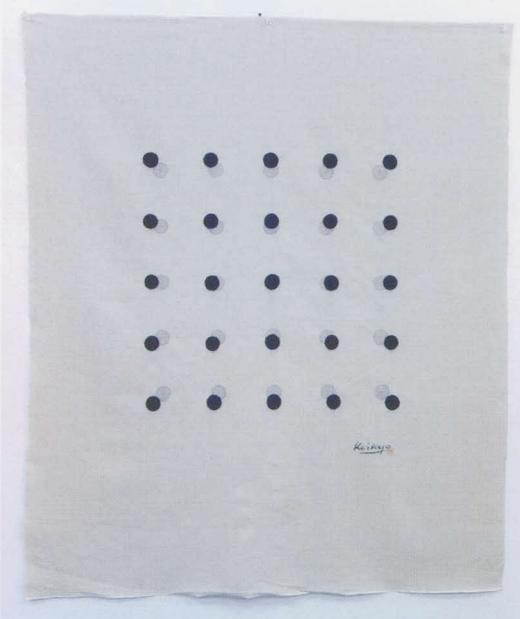
「空間概念考」
カラーペイパー 80×110cm



「AINシュタインの舌」
布貼りパネル、コピー 65×100cm



「素材のダダ的活用」
白布、色布 100×120cm



「変遷・魔方陣」
布、墨 110×120cm



「アルバースに倣えば・四角四面頌」
色布 200×200cm

前田精史 MAEDA Kiyoshi



2016年作 「RELATION」

鉄 $270 \times 270 \times 300\text{H}/\text{cm}$



2016年作
「水景(床)」
「交錯する領域(壁)」

鉄 $300 \times 150 \times 7.5\text{H}/\text{cm}$
鉄 $1000 \times 3 \times 250\text{H}/\text{cm}$

山下博己 YAMASHITA Hiroki

大きな制作態度としては、体験したことのない“自由の感覚”を目指して、現代に訴える作品を発表していくたいと思っています。

そしていつものことなのですが、作品以上に言いたい言葉はありません。

作品を自由に楽しんで頂ければ幸いです。



2017年作

「無題」

キャンバスに油彩

233.4×273.0cm



2014-2015 年作 「無題」

キャンバスに油彩 182.0×233.4cm

リキ ゴーサン
力五山 (加藤力 渡辺五大 山崎真一) RIKIGOSAN

越後妻有アートトリエンナーレ2009 出品を機に結成された美術家グループ「力五山」は、各々の作品性を維持しながらも三位一体となり、アートを媒体として地域社会の活性化をめざす「ゆるやかな共同体=協働体」である。

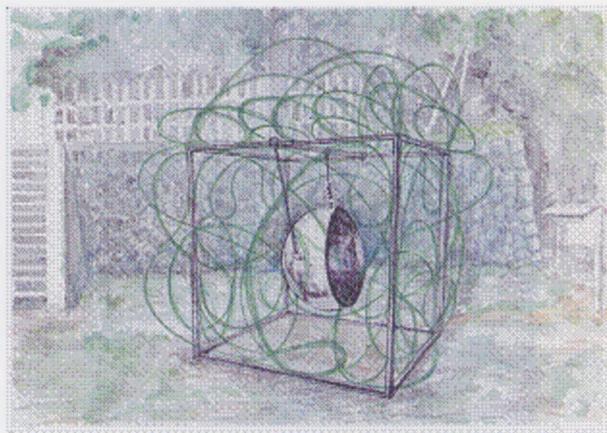
その土地、その場所でしか成立しない作品を制作することで、そこを訪れた人々にその土地や場所の魅力、歴史、意味を感じてもらい、その場から得た感動を次の時代に繋げていって欲しいとの想いを胸に、表現活動を展開している。

今回の展示では「小田原の特産（かまぼこ板）や素材（竹）を利用した鑑賞者とのコミュニケーション作品」をテーマに、清閑亭とその周りの環境を活かしながら、私達「力五山」と地元の蒲鉾業者の方々、来場者との協働制作による作品を考えている。

小田原ビエンナーレ2017 展示イメージ；《小田原清閑亭アートプロジェクト・つなぐ》

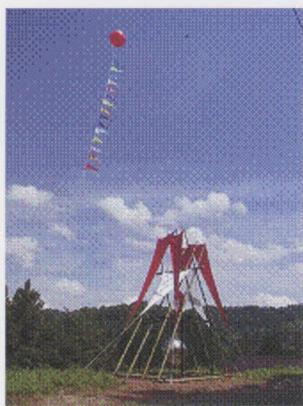


2階書間

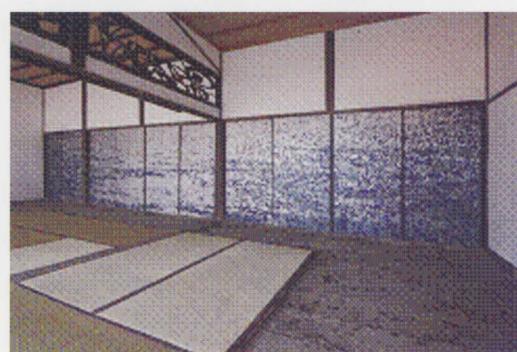


入り口庭

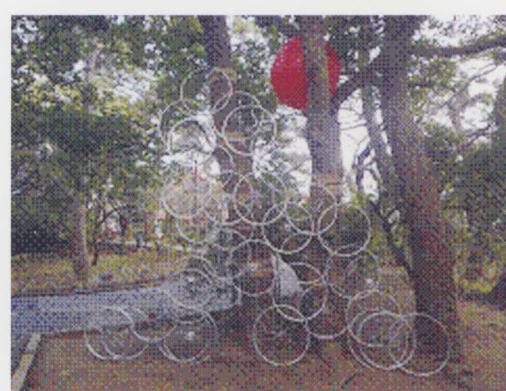
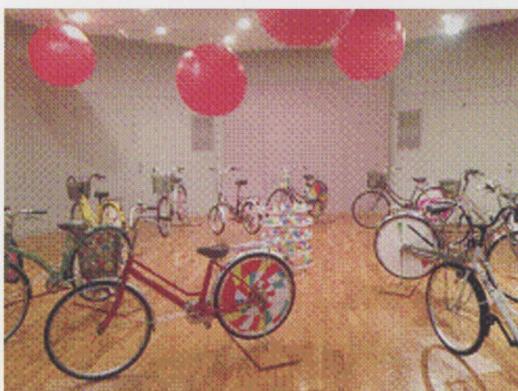
2015年 大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2015 《つなぐ - 還るところ》 新潟県 十日町市 高倉集落



2013年 濑戸内国際芸術祭 2013 《つなぐ》 香川県丸亀市本島 惣光寺



2015年 つくる展 《ちがさきチャリンコアートプロジェクト》 神奈川県茅ヶ崎市美術館



2012年 大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2012 《祭 - 還るところ》新潟県十日町市 高倉集落



米満泰彦 YONEMITSU Yasuhiko

空白の面を見る。
心が拡散して、
空白に同化する。
空虚の美しさ、
そこから始まるけれど、
それ以上の美しさはない。
私が見るとき、
あるいは、目を閉じる時、
心に対象があり、
意識は引き寄せられて、
モノの識別の領域で、
存在を錯覚する。
陰翳に遊び、
虚構を物語る。
たゆたう意識、
澀のような時間。



2017年作 「M-Rose」 キャンバス、油彩 90×145cm



2017年作 「G-Rose」 キャンバス、油彩 60×100cm

実験映画(太田曜・渡辺哲也作品上映)

太田曜作品 全て16ミリフィルム 約88分

UN RELATIF HORAIRE 1980 2 min color silent

UN RELATIF HORAIRE No3 1980 3 min color silent

TEMPS TOPOLOGIQUE 1981~82 11min b&w silent

STADEL 1985 7min color silent

FLOTTE 1993 9min color sound

DISTORTED'TELE'VISION 1997 11min color sound

INCORRECT CONTINUITY 1999 9min color sound

INCORRECT INTERMITTENCE 2000 6min color sound

SPEED TRAP 2004 6min color sound

PILG IMAGE of TIME 2008 14min color sound

ULTRA MARINE 2014 5min color sound

BLANK SPACE 2016 5min b&w + color

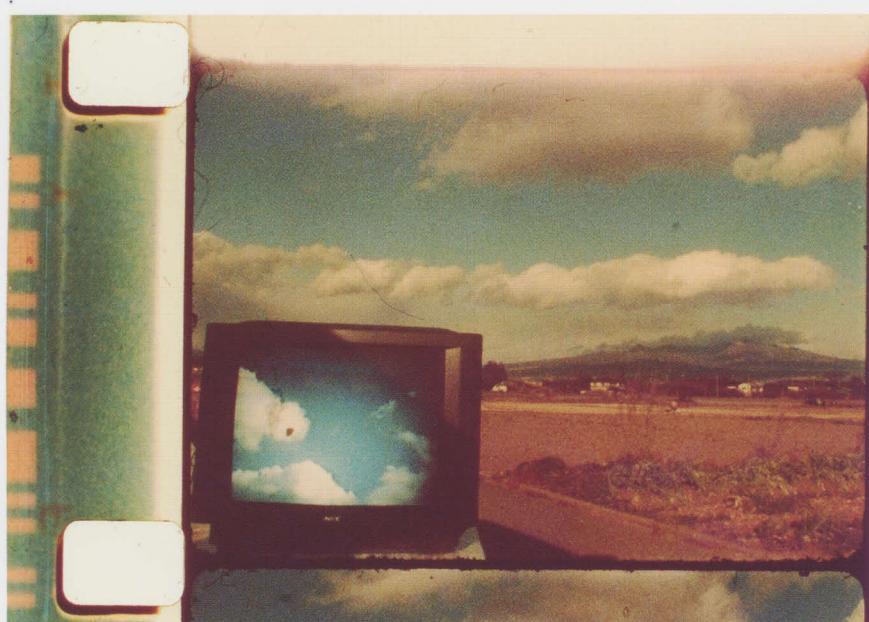
渡辺哲也作品 全て16ミリフィルム 約28分

EMULSION SEA 1972 12min b&w sound

コーヒーを飲む 1975 16min b&w sound

太田 曜 DISTORTED'TELE'VISION 1997 11min color sound

この映画は、風景の中に、ヴィデオ・モニターが置かれているという画面によって基本的に構成されている。画面内のモニターには、そのモニターが置かれている場所の風景が写し出されている。ヴィデオ・モニターが置かれているのは、六つの異なった場所である。一つの場所で基本的にワンシーンが構成されている。全体は、この異なった六つのシーンによって成り立っている。



写真展「日常のモザイク」ドキュメンタリー 2016~2017

飯室哲也・イマイ恵子・乾久子・江原正・加藤富也・加藤仁美・黒猫ネ
ウイルフリド・ゴンザレス・上楽寛・外山多映・間瀬伸一郎・宮下圭介・他

日々のさまざまな情景は、一人一人の記憶に連鎖されている。写真は人の意識と無意識の領域を自由に横断して、人の記憶の連鎖の中から世界の断章を開いて明示する。時には、私たちに不思議な時間を提供する。



飯室哲也



イマイ恵子



乾久子



加藤富也



加藤仁美



江原 正



黒猫ネ



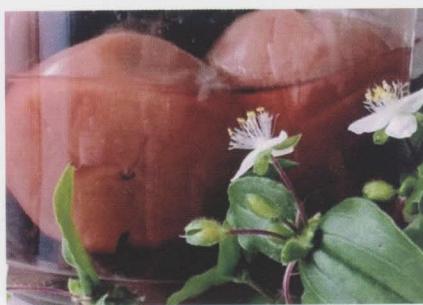
上楽 寛



間瀬伸一郎



ウイルフリド・ゴンザレス



外山多映



宮下圭介

現代美術展「小田原ビエンナーレ2017」

会期 2017年8月16日～9月18日

会場 小田原宿なりわい交流館

小田原邸園交流館清閑邸

アオキ画廊

ツノダ画廊

巨櫻の居ホール&ギャラリー

飯山邸

ギャラリーNEW新九郎

回廊“瞬”

主催 小田原ビエンナーレ実行委員会

後援 小田原市

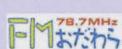
NPO法人小田原まちづくり応援団

合同会社まち元気小田原

株式会社ポスト広告 

 (テレビ神奈川) Fm yokohama 84.7

J:COM小田原



協力 Workroom I、ハーツデザイン

日本映像学会アナログメディア研究会

アオキ画廊、ツノダ画廊

巨櫻の居ホール&ギャラリー

飯山邸、回廊“瞬”

ギャラリーNEW新九郎

協賛 小田原蒲鉾協同組合

助成 公益財団法人朝日新聞文化財団